２０２０年度　入門講座

**第33課　病者の塗油**

**苦しみの意味と永遠の命**

Ⅰ　人生における苦しみ

苦しみそれ自体が悪であるとすれば、なぜ神はそのような悪が存在することをお許しになるのか。なぜ私たちは苦しむのか。肉体的、心理的、精神的苦しみ、また人間存在からくる苦しみなど、人生にはどうして苦しみがつきまとうのだろうか。古今東西、多くの人々が心を傷め悩み続けている。

苦しみは「神秘」である。人生における苦しみは避けられないが、同じ苦しみを担いながら、苦しみによって神に近づく場合と、神から離れ去る場合がある。苦しみをどのように担うかは、個々に任せられている。

病苦にどれほど意味があったとしても、肉親が病に冒されて呻く姿を見るのは耐え難いこと。東北[地震](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%C3%CF%BF%CC)のことを思うと、なぜ罪のない多くの人々がこんなひどい目に会うのかと思わざるを得ない。

悪は人間の罪の結果であって神がこのような悪の存在を放っておかれるのではない。

しかし、神の思いは人間の思いをはるかに超えている。人間の目から見れば死よりも生、病気よりも健康のほうがいいに決まっている、それはあくまでも人間の目から見たものの見え方である。

「『闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。』 闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放ち／闇も、光も、変わるところがない。」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　([詩編](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%BB%ED%CA%D4)139)   
　光と闇を同じように見通される神の目から見たとき、死と生、病気と健康、豊かさと貧しさのあいだには、もしかするとあまり区別がないのかもしれない。  
　神は[イエス・キリスト](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A4%A5%A8%A5%B9%A1%A6%A5%AD%A5%EA%A5%B9%A5%C8)において、死を含めて人間のすべての苦しみを味わった。すべてをご存じの神が、わたしたちに悪いことをするはずがない。神はすべてを善い方向に導かれるはずだということを信じよう。

Ⅱ苦しみの意味　　ヨブ記から

日本のカトリック作家遠藤周作氏は、体が弱く２０回近く手術を受けられた。最後の病気の壮絶な苦しみを見た順子夫人は、「まるでヨブのようですね」と声をかけられたそうである。

「ヨブか！そうだ。ヨブのような苦しみなのだ。治ったらヨブ記を書こう。」それ以来、まるで人が変わったように、辛さ苦しみを訴えることが全くなくなったそうである。

旧約聖書「ヨブ記」に出てくる人物。ヨブは義人であり、正しいことをしているにもかかわらず、人間の味わいうるあらゆる苦しみを身に負う。その苦しみを負いながら、神に常に語りかける。

1. ヨブ記：苦悩に真正面から向きあい、真実を求めた義人ヨブの物語。

テーマ：「正しい人がなぜ苦しまねばならないのか」。

人類の抱える矛盾、苦しみ。子供に財産にも恵まれ、幸福な生活を送り、信仰の篤い典型的な義人。ところがあるときすべての子供と使用人、家畜が死に、自分自身も頭のてっぺんから足の裏まで思い皮膚病に苦しむことになった。なぜヨブがこれほどまでに苦しむのかという問いかけ。

　　\**「私は裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。*

*主のみ名はほむべきかな」*（ヨブ1:2１）

*\*「私たちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」*（2:10）

悟りきった人のように、苦しみを受容しようとしている。

\*苦しみを受け止めきらなかったヨブは、**神と徹底的に対話**をする。

悪人がのうのうと暮らし、正しい生活を送っている人に次から次へと不幸が襲ってくる。不条理にみえる苦しみの中で、神から去っていく人もある。しかし神のみ心を受け入れたいという気持ちで、神と腹を割って話す。真実な気持ちをぶつける中で、未来が見えてくる。

\*苦悩に遭遇したときこそ真実―そこに隠されている意味―を求める。

なぜ、苦しみがあるのか、苦しみは自分にとって何を意味しているのだろう。不治の病、事故や災害で大切な人を亡くすとき、なぜ神はこんなひどいことをお許しになるのか、どうして自分の祈りを聞いてくださらないのか、神はいないなどと考えてしまう。

苦悩に出会ったとき、人間はその苦悩を罰としてとらえて苦しみを抑え込むこともあるが・・。**神はその苦しみを通して何に気付いてほしいのか**。**そこに隠されている意味を探すしかない**。

**Ⅲ　苦しみの**[**キリスト教**](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%AD%A5%EA%A5%B9%A5%C8%B6%B5)**的意味**

「苦しみはそれ自体として意味を持ちません。キリストと共に苦しまれたとき、初めて意味を持ちます。」([マザー・テレサ](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%DE%A5%B6%A1%BC%A1%A6%A5%C6%A5%EC%A5%B5))

1. イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)と共に苦しむ

　イエス・キリストの苦しみと復活に与る道。イエスは自分で苦しむことによって救いの道を開いてくださった。イエスの受難と死はイエスの愛の最高の表現である。キリストと共に苦しみ、キリストの十字架と復活に参加すること。これがキリスト教の神髄に触れる道であり、苦しみは人格を成長させ浄める。

1. 「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿に　あやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

（フィリピ３3:10-11）

1. 「今わたしは、あなたがたのために苦難を喜んで受けており、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみのなお足りないところを、わたしの肉体をもって補っている。」(コリント1:24)
2. 苦しむものへの召命：「あなた方が召されたのはこの為です。キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと模範を遺されたからです。」

（1ペトロ2:21）

D)「むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ち溢れるためです。」（Ⅰペトロ4:13）

苦しいときこそキリストと出会う時間。これらの言葉は、病苦の中にある人々に希望を与える。十字架上で一人ぼっちで苦しむイエスと共に自分も苦しみを味わいたい、イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)の苦しみを共に担いたいと願いながら、病気の苦しみを神さまに捧げるとき、わたしたちは必ず復活の栄光と喜びにも与ることができる。

２.　全人類のために苦しむ

①苦しみが善（救い）を生む

「人間の苦しみは、キリストの御受難において頂点に達しました。同時に苦しみは新しい次元に入りました。つまり、『苦しみは愛に結びつけられるようになりました』。愛は善をつくり、苦しみによって善を引き出します。ちょうどそれは、世の贖いという最高善が、キリストの十字架から引き出されたということ、しかも絶え間なく、その十字架から最高善が流れ出しているのと同じです。」（[ヨハネ・パウロ2世](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%E8%A5%CF%A5%CD%A1%A6%A5%D1%A5%A6%A5%ED2%C0%A4)）

　キリストによって苦しみは善(救い)の源となった。この神秘を言葉で説明しつくすことはできないが、病者たちはこの神秘を自分自身の体験によって悟ることができる。イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)と共に十字架の苦しみを担うとき、病者たちはそれが全人類を救うための使命に他ならないということを全身で悟る。これほどの大きな恵みはない。イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)と共に苦しむ苦しみだけが苦しみの本当の意味を教えてくれる。

②「罪のない人々の苦しみは、イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)の苦しみと同じです。イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)はわたしたちのために苦しみました。罪のない人々の苦しみもまた、イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)の苦しみと結びついてわたしたちを贖うのです。それは、『共贖』とさえ言えます。その苦しみは、世界をもっと悪い状態から救うのです。」([マザー・テレサ](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%DE%A5%B6%A1%BC%A1%A6%A5%C6%A5%EC%A5%B5))

　病者の苦しみはむしろ彼らに与えられた大いなる使命である。イ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)と共に苦しみを担うとき、病者たちはイ[エス](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%A8%A5%B9)と共に全人類を救っている。

③　苦しんでいるすべての人々と共に苦しむ  
「苦しみの世界は、それ自体が連帯を持ちます。苦しんでいる人は、似たような苦しみの状態を通して、また理解されることと世話を受けることを通して、お互いが同類になります。特に苦しみの意味を問い続けることによって似たものとなります。」([ヨハネ・パウロ2世](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%E8%A5%CF%A5%CD%A1%A6%A5%D1%A5%A6%A5%ED2%C0%A4))  
　病苦の中にある人々は自分と同じ苦しみを持った人々と連帯することができる。出会うことはなくても、苦しみにおいて病者たちは一つに結ばれる。自分だけが苦しんでいるわけではない、世の中には自分より大変な状況に置かれた人だっている、そう思って自分以外の人々の苦しみに共感するとき、病苦を耐える力が生まれてくる。

３. 人間の魂を変貌させる恵み

「この体が重い病にとりつかれ、まったく無能状態に置かれるほど、生活や行動がほとんど不可能であればあるほど、内的な『成熟や霊的偉大さ』があらわになり、健康な人に心を動かす教訓を与えています。」  
「人間の魂を変貌させる恩寵への道を他の何よりもはっきりと示すのは、苦しみです。」

（[ヨハネ・パウロ2世](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%E8%A5%CF%A5%CD%A1%A6%A5%D1%A5%A6%A5%ED2%C0%A4)）

病苦に限らず、すべての苦しみは恩寵（恵み）への道。苦しみは人間のエゴの殻を打ち砕き、ありのままの心で神の前に立つことを可能にしてくれる。苦しみの中で、自分の才能、財産、名誉、権力、健康などにより頼む心は完全に打ち砕かれ、自分には神以外になにも頼れるものがないということを痛感する。こうして神の前にまったく無力な自分を差し出すことができたとき、わたしたちの心に神の恵みがあふれるほど豊かに注がれる。苦しみの中で感じる痛みは、エゴの殻を打ち砕く痛み。キリスト者にとってすべての苦しみは恵み。苦しみの中で傲慢な心を打ち砕かれたとき、わたしたちは神の前にひざまずくことができる。

1. **どのように祈るか。**

A）賛美の祈り

　　ダニエル書補遺；アザルヤの祈りと三人の若者の祈り　大自然の賛美(日曜日の賛歌)

　　この歌が歌われた状況；異教の神を礼拝するよう命じたネブカドネザル王に背き、

燃え盛る炉に投げ込まれた三人の若者（ダニエル３章）

　　　歴史的事実かどうかはわからないが、大事なポイントをついている。苦しみの真っただ中で

神を賛美する祈りの力。苦しみや悲しみに飲み込まれてしまわないように力を与えてくれる。

おそらく皆焼け死ぬであろうが、魂は神の命の中で自由と平安を得る。

(長崎の殉教者「神をたたえよ」と死の間際に神への賛美を歌っていたと伝えられている。彼らも苦しみの中でこそ神をたたえたのだろう。)

*「なぜ生きるかが分かっていれば、どんな生き方でも大概は辛抱できるものだ。」ニーチェ*

B）「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、捜す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」(マタイ7:7)

「苦しい時の神頼み」というが、苦しい時こそ神に祈る。一人ぼっちで寂しくなったり、自分のやっていることの意味が分からなくなったり、人間関係で傷ついたり、善意でしたことが逆に恨まれたり、心身ともに疲れ切ってしまう。祈れなくなって闇の中に沈んでしまうことがある。

**どうしたらよいかわからない窮地に陥ったとき**

　ＡかＢか、どちらの道を選んだらよいか教えてください。

**どうすればいいかわかっているが、することができない。**

主よ、自分でする力がないので、それを為す力を与えて下さい。

現代科学医学の発展、人間の力で何でもできると思っている。人間的手段に頼りすぎ。

神に頼むことをしない。　（フィリッピン人病気になったら教会に行く。日本人病院に行く）

神は日本の社会でもっと働きたい、でも人間が願わなければ働きようがない。

**Ⅱ　病者の秘跡**（ヤコブの手紙5：14～15）

「あなた方の中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗

って、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは病人を救い、主が赦してくださいます。」

塗油の秘跡は、身体が弱ったり病気の状況にある人に授けられるもので、額と両手に

オリーブ油を塗り、次の言葉を唱える。

「**この聖なる塗油により、いつくしみ深い主イエスが聖霊の恵みであなたを助け、**

**罪から解放してあなたを救い、起き上がらせてくださいますように。アーメン**」

* 病者の塗油を行えるのは司教と司祭のみ。

　　　　秘跡によって与えられる賜物

油を塗るという行為が象徴するのは、聖霊のたまものである。健康の回復、罪の赦し、

希望と慰めを受け、「主の死と復活への一致」へとその人を導く。

**Ⅲ　死と永遠のいのちの希望**

**１．科学技術と物質文明から霊性の時代への移行**

２１世紀は霊性の時代と言われている。物質文明の栄えたここ百年くらいの間、死後の世界があると心の底から信じる人が減ってしまった。しかし、科学技術と物質文命の進歩は、逆に　多くの人々に人間を超えた偉大な何か、宇宙や生命を創造した何かが存在するのではないかという問いかけを投げかけるようになったのである。

問　a. 死んでしまえばすべては消え去ってしまうのだろうか？

　　人が一生かかって築いてきた愛情も死と共に幻影として消えてしまうものか？

　　生きる意味を失ってしまう。

　　b. 金とテクノロジーで死を克服できるか？　臓器移植、再生医療、遺伝子操作etc.

　　人間の傲慢さと愚劣さの極致。自分の限りある生を否定。人生に目的があることを否定

**２．イエス・キリストの過ぎ越しの秘儀に与る「死」**

「私たちの体は「蒔かれるときは朽ちるものでも朽ちない者に復活する。」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Ⅰコリ14:42

キリスト教の中心は、イエス・キリストが十字架上で死に打ち勝って復活し永遠のいのちの内に生きておられるという信仰である。洗礼によってキリストの命に結ばれる者は、死の後にも、復活したイエスとともに永遠のいのちに生きることができると信じる。

死んだら一巻の終わりだ、無になるだけだ、何も生きているうちから死について考えて心を暗くする

ことはないと強がりを言う人も、老いや死から逃れるわけにはいかない。これほど確実なものはない。

一人ひとりの人間の生は例外なく死によって中断される。**人間の目**から見るから中断されるかのように見える。**神の目**には連続した命、生は不滅。中断と見えた生は復活の命に変容されているという不思議！

* 死は人間の成長と発達のプロセスの一つであり、死は永遠のいのちへの過ぎ越しである。

洗礼の秘跡の話の中で、人間は人生の節目に次の段階へと過ぎ越しながら成長することに触れた。母の胎内から誕生への移行に始まり、成人式、結婚式と、過ぎ越して行き、そのすべての移行に、貴重なものの放棄を余儀なくされる。最終の過ぎ越しが死。

復活祭を “パスカ” ともいう。過ぎ越しの意味。イエスも十字架の死を過ぎ越して復活の命に入られたということである。

椎名麟三　「僕は洗礼を受けたから、これでじたばたして、虚空をつかんで、死にたくない死にたくないと叫んで死ねるようになったよ。」

＊苦しい時にイエスも死ぬときあんな苦しい思いをしたのだ、自分もイエスのように苦しむのだと、イエスの死に自分を重ね合わせて考えるのだということ。日本人の死に方の美学から解放。

幸田露伴は臨終が迫った時、娘の文さんに後のことを託して、「じゃ、おれは死ぬよ」と言って息絶えた。

**３．聖書に見る「永遠のいのち」**

＊神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ3:16）

＊「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていて

わたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」（ヨハネ11:25,26）

＊「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれていることが実現するのです。『死は勝利に飲み込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。』死のとげは罪であり、罪の力は律法です。私たちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」（Ⅰコリ15:54-57）

亡くなった人は、キリストの約束されたとおり、復活して生きる者となる。よっぽど激しく神を否定しない限り神の所に行かれるに決まっている。神の愛は罪より大きいから。（天国の門に立つペトロとテレースの話）その人が生きている間に他者に対して示した温かさと愛は神さまの手帳に残り、百倍の報いをくださる。キリスト者にとって死は悲しみであっても希望がある。死は絶望的で暗いものではなく、**キリストに出会うためのプロセス**であるから。

1. **死の準備教育の必要性**

デス・エデュケーション、グリーフ・エデュケーション（悲しみの教育）

紛らわすのではなく、死を直面して乗り越えさせる。

子供たちのゲーム;「死んでもすぐ生き返る」病院で死ぬ人が多く、実際の死に直面する体験が少な　　い

**Ⅳ　生きることの意味**

死について考えることは人生にどのような意味があるか、生きる意味を問うことでもある。キリスト教は、生と死の問題に対して、「永遠のいのち」という人間の究極の救いの信仰を持って答える。この復活と永遠の生命に対する希望こそ、人間に「生きる」意味を与えるのである。それは、神から自分に託された夢(使命)を充全に生きることである。

「来世に希望を持たぬ人は、この世ですでに死んでいるようなものだ」（ゲーテ）

人生のゴールが無だとしたら人生の旅は目標を失う。しかし、死に意味があるなら(死のかなたに本当の目的地があるなら)苦しみの多い人生に深い意味があることになる。

死は人生の最後の過ぎ越しである。この段階をどのように過ぎ越していくかは生き方次第。

自分の人生に意味を与えてきたものが、死にも意味を与えるものとなる。精いっぱい生きてきたなら死は恐るべきものでも、悲しむべきものでもない。死ぬことを心配するよりも、今日何をすべきかを心配するべきかもしれない。行動ばかりではなく、思いにおいても言葉においても、最高の選択ができるように！

映画『生きる』（黒沢明監督）

死に直面した人間が、自分は誰なのか、何のために生まれて来たのか、どこへ行こうとしているのか？真剣に考え，自己を確立していく過程を描いた物語。

独りの人間の死についての映画の題が実は「生きる」ことをテーマにしている。サラリーマンとして役所勤め３０年、突然がんの宣告を受ける。それまでの人生振り返り、何もしてこなかったことに気付く。やり残した仕事、住民の要請に応え公園を作ることに残りの命をかけた。

死を想定してどのように生きたら良いかが見えてくる。（生き方が人の死を決める。）

　どれだけ神の愛に応えて生きてきたか？　どれだけ他者に開かれて生きてきたか。

そのことが、すなわち自己実現のへ道であり、人間の成長の完成、幸せにつながる。

2. 生きる知恵

a「自分の置かれた境遇に満足する」フィリッピ４：11-13

貧しく生きるすべも豊かに生きる術も知っている。置かれた境遇の中で、自分が持っている才能を精いっぱい発揮し、自分らしく生ること考える。この方法がいついかなるときにも自分自身を見失わず幸せに生きる術である。神が自分に対して何を望まれているか、自分の使命を生きる。パウロの言う「生きる知恵」。

死を意識して生きる時、初めて現実を過不足なく判断して生きることができるのかもしれない。

b「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、

　イエス・キリストにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

次の三つの鍵を使えば死ぬまでの時間が有意義になる。　　　　　　　(Ⅰテサ5：16－18)

1. 第一の鍵：喜びを見つけること。「喜べ」と言う命令は実に稀。どんな状況にあっても

　　　　　　　　　　　　　　　　　喜ぶべき面を見出すことが、人間の悲痛な義務。

1. 第二の鍵：祈ること。全てを見ていてくださる神に、苦しい胸の内やお願いしたいことなど

　　　　　　　　　　　神に話しかけるように祈ると、これほど心休まる手はない。

1. 第三の鍵：感謝すること。すべてのことを感謝できる心を持つこと。

死後の世界　人間は死んだらどうなるのか、死後の生命は果たしてあるのか

　　死後の世界について体験的に教えてくれる人はだれもいない。科学的に証明することは不可能。逆に死ですべてが終わるという証明も不可能。

　　キュープラ・ロス『死の心理』『死を受容する心理』臨死体験２万人を調査

　　死は消滅ではなくて、次の世界へ行くプロセス。

　　共通の体験①意識を失った後自分の肉体がはっきり見えた。②かつて亡くなった人たちの中で親しい人と出会い。③慈愛に満ちた柔らかい光に包まれた。

　　「蝶がさなぎを残して旅立っていくように、死も同じようにさなぎを残して旅立つ」のと同じ、

　　人間の経なければならない通過儀礼

　１．キリスト教は生と死の問題人間の究極の救いの問題に対して、「体の復活」「永遠の命」

　　という信仰をもって答えている。

天国；天のどこかにそのような場所があるというより、神の命に完全に預かること。

神の愛がすべてを支配し照らしている状態。神に満たされること。

祈りは神の国の味見のようなもの

地獄：人間は神の命を断る可能性を持っている。神の恵み、愛を断り、神を離れることが永遠の滅びになる。「神から離れること以上の悪はない。」（カール・ラーナー）

煉獄（浄め）：神の愛に十分応えて生きているとは言えない私たちは、罪の状態で神

の栄光に与ることはできない。神の前に出る前に、自分の汚れを浄める必要が

ある。これが「煉獄」として表現されている。最終的な浄めは神との出会いに

よって行われるが、今の生活の中の人間関係や出来事が浄めになっている。

審判、再臨などはキリスト教の希望のシンボル。

参考；「死後の命を信じるか」先人達の様々な説を判断材料とし自由に検討自分なりの結論を。

　　　\*来生信仰；古代エジプトのピラミッド、ミイラ、墓の壁画etc.

\*アメリカの先住民族の間にある生者と死者の霊的な一体感

\*古代ギリシャ哲学；ソクラテスやプラトンの霊魂不滅説

　　　　　　人間の本質である霊魂は本来不滅であり、その魂は死後肉体を離れて新たな存在の次元に移るとする説。

　　\*ドイツの哲学者カント；「人間には、道徳的法則の命令によって、完全なる者となることが義務付けられている。この壮大な義務を果たすために、無限の高みを目指すので死を超えてなお存在することが必要。魂は不死である。

\*ドイツの文豪ゲーテ；霊魂の不滅をたとえで示す。

　死とは日が落ちる時のようなものだ。私たちの目からは隠れて見えなくなってし

まっても太陽そのものは地平線の向こうで変わらず輝いている。それと同じように、

生命は死後も変わらず存在し続けるのだ。

\*フランスの科学者ブレーズ・パスカル；

人間の不滅性と死後の生命を信じるか否かの決断を、一つの賭けと見なす。

　　　もし、人が死後の生命を信じていたのに、実はそれが存在しなかったとしても、何も損したことにならない。しかし、死後の生命が存在するにもかかわらず、それを信じなかったために手に入れそこなったら取り返しがつかない。その人は永久に全てを失うことになる。」「信じればすべてを手に入れることができ、失うものは何もないのだから、信じる方に賭けるべきだ」

２．「終末」という語の意味

ギリシャ語「エスカトン」と言う語の意味は「究極的で一番深い奥義」をさす。

「終末」を「終わり」とか「最後」の意味で捉えると狭くなり、本来の意味からずれる。むしろ遂にやってくる究極的なもの、永遠に生きる希望ともいえるものを表している。

キリスト教の終末論にとって決定的なことは、「イエスの死と復活」である。私たちは、キリストにおいて、希望を持って生きることに招かれている。信仰は人を希望へ導き、希望の道は「無条件な愛」の体験から始まる。キリスト教的な終末論的生き方とは、この無条件な愛を生きることである。

　　　「やさしい光よ　私を導いてください

私を取り巻く闇の中で　私を導いてください

私は遠い景色まで見ることを要求しない

次の一歩がわかれば　それで足りる」　ニューマン

**終わりの祈り**

世の罪を身に負って十字架の苦しみを受けられた主キリストが、私たちを強めてくださるように祈りましょう。苦しみ悩む人の中で　あなたに叫ぶ人々の声に耳を傾けてください。あなたの十字架に現わされる神の力に信頼して勇気づけられますように。私たちも批判や誤解を恐れず、進んで人々に奉仕することができますように、主の祈りを唱えましょう。